

平成 31 年 4 月 25 日

若手研究者海外挑戦プログラム報告書

独立行政法人日本学術振興会 理事長 殿

受付番号 201880211

三國 珠香

氏 名 _____

(氏名は必ず自署すること)

若手研究者海外挑戦プログラムによる派遣を終了しましたので、下記のとおり報告いたします。
なお、下記記載の内容については相違ありません。

記

1. 派遣先：都市名 ウィーン (国名 オーストリア)
2. 研究課題名 (和文) : 博物館展示場面における来館者行動の実験科学
3. 派遣期間：平成 30 年 9 月 1 日 ~ 平成 31 年 3 月 31 日 (212 日間)
4. 受入機関名・部局名：ウィーン大学
5. 派遣先で従事した研究内容と研究状況 (1/2ページ程度を目安に記入すること)

博物館や美術館の展覧会場において芸術作品の鑑賞を繰り返す際に、作品に対する鑑賞時間や評価(好ましさ、美しさ等)は時間経過と共に減衰していくことが知られている。この現象は「博物館疲労(museum fatigue)」として古くから知られており、来館者の学習を妨げる可能性があることから、展示場面では阻止されるべき現象と指摘されている。これまでの研究では、作品鑑賞者の行動を実験室場面で測定するための手続きを開発し、この現象の発生機序、ならびに反応の減衰を阻止する際に有用な要因を検討してきた。

芸術作品の鑑賞方略には大きな文化差があることが知られており、近年では文化間比較研究の重要性が強調されている。そこで派遣先では、実験室場面において芸術作品を反復して鑑賞する際の日本人と西洋人の行動を比較することを目的に、一連の研究に従事した。

研究1 鑑賞時間・評定値の減衰過程の文化間比較

実験室場面において、120枚の西洋絵画画像刺激を鑑賞する際の鑑賞時間・美的評定(美しさ・面白さ・好ましさ)の推移を文化間で比較した。実験の結果から、①鑑賞時間や美的評定は文化普遍的に呈示回数に関数として減衰すること②各作品に対する鑑賞時間はオーストリア人の方が長いこと③鑑賞時間・評価の減衰はオーストリア人の方が大きく生じることが示された。従って、博物館疲労は文化普遍的に観察される現象であるが、反応の推移には文化で違いがあることが示された。本研究で使用された絵画作品は全て西洋画であり、全ての参加者が絵画鑑賞に馴染みがなかったことを考慮すると、作品に対する親近性が、鑑賞時間・長期的鑑賞における鑑賞時間や評価の推移に影響を与える重要な要因であると考えられる。

研究2 連続鑑賞場面における眼球運動の文化間比較

実験室場面において、西洋絵画、日本絵画、風景写真を観察している際の眼球運動パターンを文化間で比較した。実験の結果から、オーストリア人の参加者は画面の左右を反復して観察するのに対して、日本人の参加者は画面の上下左右を万遍なく観察することが示された。さらに、オーストリア人の参加者は観察する刺激の種類(e.g., 絵画・写真)に関係なく左右方向のサッケードを繰り返すのに対して、日本人の参加者は観察する刺激の種類に応じて、視線パターンを変化させていることが示された。具体的には、日本人参加者が芸術作品(西洋絵画・日本絵画)を鑑賞している際に、上下方向のサッケード回数が増加することが示された。

6. 研究成果発表等の見通し及び今後の研究計画の方向性 (1/2ページ程度を目安に記入すること)

派遣先で実施した研究1に関しては、Leder教授と共同での執筆が終了しており、本年度5月に *Psychology of Aesthetics, Creativity and the Arts* 誌に投稿する予定である。研究2に関しては、Leder教授の他、ウィーン大学美術史専攻Rosenberg教授をオーサーに含む形でPNAS誌に投稿する予定である。本派遣では、長期にわたる来館者行動を計測するための機材が不足していた関係から、実際の博物館における来館者行動の測定、ならびに比較を行うことが出来なかった。このため、2019年度7月を目処に再度オーストリアに渡澳し、博物館場面での実験を遂行する予定である。派遣終了後も、ウィーン大学の研究員ならびにLeder教授とは密に連絡を取り合い、文化間比較のための実験環境完備に勤めている。今後の研究の方向性については、派遣先での研究を発展させる形で、文化背景や芸術鑑賞の熟達度合いが鑑賞方略に与える影響について検討していくとともに、実験室場面で得られた知見を実際の博物館場面で検討し、より応用性の高い研究成果を挙げることを目標にしている。

7. 本プログラムに採用されたことで得られたこと (1/2ページ程度を目安に記入すること)

学際的交流 派遣先のウィーン大学では、Leder教授の研究室に所属すると同時に、Leder教授の共同研究者である美術史専攻のRaphael Rosenberg教授のゼミにも参加した。これまでに、美学や美術史を専門としている研究者と定期的に議論を交わす機会を持たなかったため、非常に新鮮かつ貴重な体験であった。同時に、さまざまな学術領域の研究者と、建設的な議論を展開する難しさを痛感した。例えば心理学専攻で日常的に使用されている用語や概念は、美学や美術史を専門としている研究者には伝わらないことがある。従って、他領域の研究者にも咀嚼できる形で自身の研究を呈示する必要がある。一見当たり前のように感じられる事柄だが、いざ議論を深めようとする際に、これらの過程がいかに困難で重要であるかを知ることが出来たのは、非常に貴重な経験であった。

充実した共同研究 ウィーン大学に滞在している間、自身の研究に従事する傍で、Leder教授の研究室に所属する研究員との共同研究にも参加した。派遣先の研究室は、所属研究員による共同研究が盛んに行われており、大勢の研究者が協力して研究を作り上げていく姿を目にしたことは非常に印象的であった。自身の興味や関心を超え、これまでに経験したことがない心理学実験を実施することができたことは、これからの研究を展開する上で非常に貴重な機会であった。